

コミュニケーション能力を育成する英語授業の指導過程

和田 憲明

要旨

本研究の目的は、学習指導要領において英語教育の目標として掲げられてきたコミュニケーション能力の育成を実現させるために求められる中学校・高等学校における英語授業のあり方を検討することである。特にコミュニケーション能力を育成する視点から、どのような教授理念に基づき、どのような指導過程を通して授業を構築するべきかを研究した。

今回の研究を通して、授業計画の視点、教授法と英語授業の構成及び中学校・高等学校の指導過程の分析から以下の点を確認することができた。

- ① 英語授業を計画する上で必要な要素や指導過程を構成する活動とその意義についてまとめることができた。その中で1時間の授業はそれだけで成立するものではなく、前後の授業や単元、年間指導計画と密接に関連している。
- ② 教授法と英語授業の構成においては、時代の指導法による一定の影響は認められるが、英語授業の指導過程において大きな相違は見い出せない。これはPPPに代表される文法事項・文構造の習得に重点を置いて英語授業が構成されてきたためと考えられる。
- ③ パーマー賞受賞者の中学校・高等学校の授業における指導過程を指導案及びビデオ映像から分析を行った結果、中学校・高等学校においてコミュニケーション能力を育成する授業のポイントと指導過程の特徴が明らかになった。

キーワード：英語授業の構成、Teaching Procedure、コミュニケーション能力の育成、新学習指導要領、PPP授業モデル

1. はじめに

56年ぶりに東京で開催されるオリンピックを睨んで、文部科学省は2017年3月に小中学校における新学習指導要領を、2018年3月には高等学校の新学習指導要領を公示した。今回の学習指導要領の改訂のポイントとしては以下の3点が挙げられている。

- ①これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かして、児童生徒が未来を切り拓くために必要な資質・能力を確実に育成すること。その際、子供たちに求められる資質・能力を社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること。
- ②知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、「確かな学力」を育成すること。
- ③先行する特別教科化など道徳教育の充実や体験活動を重視するとともに、体育・健康に関する指導の充実により、「豊かな心や健やかな体」を育成すること。

以上の今回の改訂の基本的な考え方を実現させ、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理するよう新学習指導要領は求めている。そしてこのような学習を知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」と定義づけている。また、このような「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには、教育現場におけるこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化が不可欠であると結論づけている。

また今回の学習指導要領改訂の特徴の一つとして、小・中・高等

学校一貫の外国語教育の充実が挙げられる。小学校において、中学年で「外国語活動」を、高学年で「外国語科」を導入するとともに、小・中・高等学校一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図る目標を設定し、児童生徒の外国語力を育成することが求められている。その中で、外国語教育の目標としてコミュニケーション能力の育成が従来と同様に掲げられている。

2. 研究の目的及び方法

本研究の目的は、新学習指導要領においても英語教育の目標として掲げられているコミュニケーション能力の育成を実現させるために求められる中学校・高等学校における英語授業のあり方を検討することである。とりわけ、従来から日本の英語教育の目標として挙げられてきたコミュニケーション能力を育成する視点から、どのような教授理念に基づき、どのような指導過程を通して授業を構築するべきかを探っていく。

研究内容としては、まず授業計画の視点としてBrown (2001) や青木 (1994) による先行研究を取り上げ、英語授業を計画する上で必要な要素や指導過程を構成する活動とその意義について検討を加える。

次に、教授法と英語授業の構成においては、PalmerのOral Method以降日本の英語教育が影響を受けてきた時代ごとの教授法と英語授業との関連を、金田 (1986)、宮田 (1984)、池永 (1981) らの先行研究を基に検討する。その中で近年の日本の英語教育に影響を与えた1960年代のPPP授業モデルに焦点を当て、その利点と問題点を明らかにする。またコミュニケーション能力の育成を目指した中学校の授業モデルとして高橋 (2017) を取り上げる。高橋はコミュニケーション能力の育成を目指した多くの中学校英語授業の実践から指導過程の基本形と活動の意義付けを行っている。

最後に、語学教育研究所によるパーマー賞受賞者の中学校・高等学校の授業における指導過程を指導案及びビデオ映像から分析を行う。中学校は1995年度から2000年度にかけてパーマー賞を受賞された兵庫県の2名の教諭の授業、高等学校は2014年度に同賞を受賞された大阪府の1名の教諭の授業の分析を行う。

以上のように日本の英語教育における授業構成の変遷に考察を加えるとともに、生徒のコミュニケーション能力を育成する授業として多くの人に認められた授業実践を分析することによって、これから新学習指導要領によって大きく変わる英語教育において目指すべき英語授業のあり方についてその方向性を示していきたい。

3. 研究内容

3.1 授業計画の視点

Brown (2001, p. 149) は、授業を a unified set of activities that cover a period of classroom time (1時間の授業時間にまたがる統一された一連の活動) と定義し、授業の重要性として steps along a curriculum (カリキュラムにおける一連の段階) を挙げている。また Farrell (2002, p. 30) は、授業計画を a written description of how students will move toward attaining specific objectives (生徒が特定の目標に向かって前進する様子の記述) と定義し、授業計画は the end result of a complex planning process that includes the yearly, term, and unit plans (年間・学期・単元計画を含む複合的な指導計画の結果) であると述べている。すなわち、授業を計画する場合、1時間の授業計画だけでは不十分であり、カリキュラム全体における授業の位置付けや前後の単元や授業とのつながりを意識した授業計画が求められるということである。

また Brown (2001) は授業計画の要素として次の6つを挙げている。

- ① Goal(s) (到達目標)
- ② Objectives (授業のねらい)
- ③ Materials and Equipment (教材・教具)
- ④ Procedures (授業展開)
- ⑤ Evaluation (評価)
- ⑥ Extra-Class Work (家庭学習・課題)

② Objectives については、授業を通して生徒が習得することから明確に示すことの重要性を述べながら、効果的な授業のねらいの設定方法として、terminal lesson objective 及び enabling objectives を設定することを提案している。terminal lesson objective は授業の最終目標であり、enabling objectives はそれを達成するための下位項目である。以下は、その具体例である。

Terminal lesson objective
・ Students will successfully request information about airplane arrivals and departures.
Enabling objective
・ Students will comprehend and produce the following ten new vocabulary items.
・ Students will read and understand an airline schedule.
・ Students will produce questions with when, where, and what time.
・ Students will produce appropriate polite forms of requesting.

④ Procedures に関しては、様々なバリエーションがあるとしながらも、一般的には Warm-up, A set of activities and techniques (一連の活動や技能), Closure が含まれるべきであるとしている。また、一連の活動や技能に含まれるものとしては、1. whole-class work, 2. small-group and pair work, 3. teacher talk, 4. student talk を挙げている。

青木 (1990) は授業案の構成要素として、「A 指導過程」「B 指導項目」「C 到達レベル」「D 活動環境」「E 評価の項目と尺度」を挙げるとともに授業過程を「復習」→「導入」→「展開」→「整理」と捉え、英語の授業過程における技能別の練習形式(言語活動)を提示している。

「A 指導過程」は1課または1単元単位の年間の指導を見通した段階的で発展的な指導に要する時間設定、「B 指導項目」は授業で指導すべき言語の内容と形式、「C 到達レベル」は理解か運用かの区別も含め、機能的に技能的に生徒が到達すべきレベル、「D 活動環境」は生徒が種々の練習形式に取り組む条件(教師の指示、文脈、場面等)、「E 評価の項目と尺度」は授業で設定される評価項目とその尺度及びそのチェック形式(観察・テスト等)と手段・方法、さらに結果に対する対処法がそれぞれの内容となっている。

さらに青木 (1994) は指導過程を細分化し、Warm-up, 復習, 新文型・新出語句の導入と練習, 本文の導入, 内容理解の確認, 重要な箇所の解説と練習, 音読練習, 応用練習, 整理の授業の流れを提示している。また英語授業の指導過程を構成する活動の意義付けを以下のように行っている。

表1 英語授業における指導過程の意義

授業構成要素	活動の意義
1. Warm-up	学習の雰囲気づくり
2. 復習 (Review)	既習事項の補強と発展
3. 導入 (Presentation of New Materials)	新学習事項の理解
4. 練習 (Practice)	新学習事項の定着
5. 応用 (Application)	言語活動への発展
6. 整理 (Consolidation)	学習事項の再確認と転移

1. Warm-upの具体例として、英語による挨拶、天候、曜日、行事、ニュースなどについての英問英答、Teacher Talk、生徒によるスピーチ、歌、ゲームなどを挙げており、次の復習の活動へとつながることが望ましいとしている。2. Reviewは前時の主要学習事項の定着度を確認し、さらなる定着やより流暢な英語の運用を促すことが目的としている。具体的な活動例として、文型練習、対話練習、英問英答などを挙げている。3. Presentation of New Materialsの方法として、内容理解に重点を置く方法と言語形式(form)の理解に重点を置く方法があることを指摘したうえで、後者には帰納的方法と演繹的方法があると述べている。4. Practiceは「形式操作に慣れ再生が正確にできるようになるために、十分な量の練習をスピーディに行う(skill-getting)段階」と定義づけている。また、5. Applicationは、まとまりのある文章や談話の中で、概要や要点を処理する言語活動が中心となる段階(skill-using)であることを指摘している。6. Consolidationは、授業中に学習した内容や言語

形式のまとめ及び再確認を行い、学習事項が転移して利用できることをねらいとしている。

3.2 教授法と英語授業の構成

コミュニケーションな英語授業を構築する場合、文法項目をいかに指導すべきであるかという問題を考える必要がある。文法の指導方法は時代時代の教授法に強く影響を受けてきたと言える。

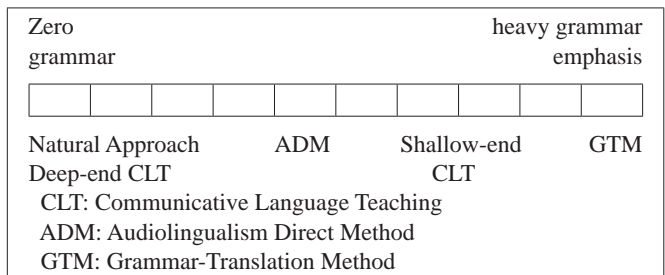
Thornbury (1999) は、文法指導の典型的な方法として PPP モデルを挙げている。PPP モデルとは、新しい文法事項を教える場合、まず新言語材料の提示 (Presentation) を教師が行い、次に提示した文法事項を用いた練習 (Practice) を通して正確さ (accuracy) を身に付けさせ、最後に表現活動 (Production) を通して流暢さ (fluency) を養う指導過程である (図 1)。

Thornbury (1999) は、PPP モデルは知識の連続した段階的な練習を通してスキルに転化されるという信念に基づいており、PPP モデルでは授業の内容や展開の主導権は教師にあると述べている。また、PPP の特徴として、accuracy-to-fluency (流暢さよりも正確さを重視) を挙げており、PPP に対するコミュニケーション・アプローチの指導法として、正確さより流暢さを重視する (fluency-to-accuracy) タスク中心の指導法を挙げている。

タスク中心の指導法による授業展開として、まず学習者は教師が設定したコミュニケーションなタスクを行い、次に教師は学習者がタスクを遂行する上で使用した表現や文法項目を確認することによって定着を図る。そして最後に、発展させたタスクに取り組みさせるという図 2 に示された学習手順を踏む。



また Thornbury (1999, p. 23) は文法指導と教授法の関連について以下のように示している (図 3)。



日本における英語教育において古くから用いられてきた Grammar-Translation Method (文法訳読式教授法) は文法指導中心の教授法と言える。それに対して、Krashen & Terrell (1983) が提唱した Natural Approach では、production より comprehension が優先されるため、そのシラバスも文構造や文法事項ではなくコミュニケーション中心となっている。また両者の中間に位置する教授法

が Audiolingualism Direct Method (オーラル・アプローチ、口頭教授法) である。オーラル・アプローチは Bloomfield, Fries らの構造言語学と Skinner らの行動主義言語学に基づいて、言語指導の初期において口頭練習のみを行う教授法であり、口頭による pattern practice などによって文法の定着を図る教授法である。

一方 1970 年代から英語教育において広まってきた Communicative Language Teaching (コミュニケーション・アプローチ) はコミュニケーション能力の育成を主眼とした教授法であるが、取り入れる指導法によって文法事項の比重は変化すると考えられている。

また金田ら (1986) は、英語授業は、その時代を代表する教授理論とそれを反映した学習指導要領に大きく影響を受けてきた点を指摘し、戦後の英語授業のパターンを ① 習慣形成型 (昭和 20 年代)、② 文型練習型 (昭和 30 年代)、③ 認知学習型・教育工学型 (昭和 40 年代)、④ 伝達発信型・総合型 (昭和 50 年代～) の 4 つのパターンに類型化している。

習慣形成型授業は、戦前からの Palmer の Oral Method に基づく授業である。授業の展開は表 2 に示す通りであり、2. Review Questions から 4. Test Questions までは生徒は教科書を閉じたままオーラル中心に授業は展開される。

表 2 習慣形成型授業の流れ

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. Review Reading
2. Review Questions
3. Oral Introduction
4. Test Questions
5. Reading
6. Explanation
7. Consolidation |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

昭和 20 年代の習慣形成型授業に続いてアメリカ構造言語学の影響を強く受けて、昭和 30 年代に文型練習型授業パターンが形成される。これは Fries の Oral Approach の影響を受けており、昭和 20 年代の Oral Method を基盤とした習慣形成型授業を融合した形で成立し、日本におけるオーラルを重視した英語授業の定型の一つとされている。また当時の学習指導要領に見られる英語授業の特徴としては、暗記・暗唱の重視、正答と反復練習の必要性、口頭練習の多様、運用度の高い言語材料の精選、文型中心・文法の帰納的指導などが挙げられる (宮田, 1984)。

表 3 文型練習型授業のモデル

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A. Review (15-20 min.)
1. Choral reading and recitation of the review material
2. Pattern practice
(A) Variation
(B) Selection
3. Written test |
| B. Presentation of the new material (10-15 min.)
1. Oral introduction
2. Mim-mem
3. Check of understanding |
| C. Reading & check of understanding (10-15 min.)
1. Reading of the day's text
2. Check of understanding
3. Writing, if necessary |
| D. Consolidation (5 min.) |

表3は文型練習型授業の例を示しているが、PalmerのOral Methodで導入されたoral introductionを用いた未習の文法事項の導入が行われているとともに、FriesらによるOral Approachの指導技術であるpattern practiceやmim-men（模倣暗記）が取り入れられている。

金田ら（1986, p. 38）は、昭和40年代を「構造主義的教授法に代わる新しい説得力をもつ理論が確立されず、習慣形成理論と認知学習理論の対立の中で、各種の教授法の試みが乱立した時代」と捉え、AsherのTotal Physical Response, GattegnoのSilent Way, CurranのCounseling Learningなど認知学習を背景とした教授法が開発されたとしている。その中でもChomskyの変形文法の影響を受け、基本文とその派生過程に教材解釈の視点を置いた指導過程が提案された。以下の3段階の指導法がそれに当たる。

第一段階	目標の明示と基本文の提示
第二段階	教材の観察による生成過程の整理
第三段階	整理された手順による生成過程の実現練習

この変形文法の影響を受けた指導過程は、文構造の分析に重点を置いた指導法であるが、文法の明示的な提示と機械的な練習を伴ったものとなっている。

金田らが最後に取り上げている伝達発信型授業は、従来の模倣・反復練習中心の授業を脱して、内容を重視し、意思の伝達をねらいとするコミュニケーション中心の授業である。従来の文法中心から概念中心のシラバスへの変更の背景にあるのは、真のコミュニケーションを目指すCommunicative Approachと外国語教育に人間教育の側面を取り入れようとするHumanistic Approachである。青木・田中（1985, p. 21）は、コミュニケーション能力を育成する指導過程として従来型のPPPモデルに対して以下のモデルを提示している（図4）。

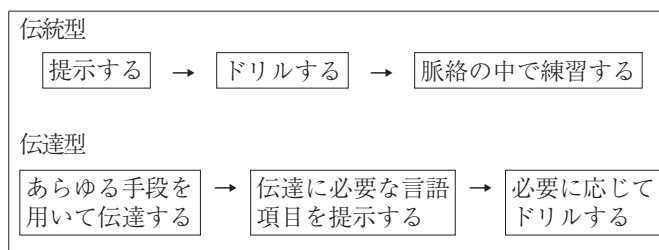


図4 コミュニケーション能力育成の指導手順

池永（1981）は、英語授業の指導案作成上の留意点として、以下の点を挙げた上で英語授業のモデル例（表4）を示している。

- ①全体のカリキュラムの中の位置づけを明確にする
- ②多くのactivitiesを考える（5～7種類）
- ③「教科書で教える」ことを考える
- ④指導目標を明確にする
- ⑤「復習」「提示」などについて正しい指導を行う
- ⑥文字に依存しすぎないようにする
- ⑦個人差に応じる配慮が必要である
- ⑧言語活動に対する配慮をする
- ⑨教育機器の活用を考える

表4 英語指導案の実例における本時の指導過程

1. Review (1) Question and Answer drill using to-infinitive Do you want to play basketball after school? Does your brother need to take lunch to school? (2) Writing exercise I'm planning to do my homework on Saturday. Do you want to come over to my house on Sunday?
2. Pronunciation Drill [l]—[r] Grass is green.
3. Presentation of the new pattern (1) Question and Answer Who is washing the car? etc. (2) Presentation 1) Father wants Tom to wash the car. cf. Father wants to wash the car. 2) Listening to the new pattern 3) Oral repetition of the new pattern 4) Oral drill of the new pattern 5) Oral presentation of today's material a) Presentation b) Question and answer
4. Reading 1) Model reading [twice] 2) Listening to the tape [once] 3) Individual reading 4) Check-up 1) Content: I want everything to look nice.
5. Explanation of difficult points 1) I want you to wash the car. I want to wash the car. 2) Do I have to?
6. Assignment S+V+O+to-不定詞を含む dialog を作成。

コミュニケーション能力の育成が目標に挙げられている時代であるが、授業における学習内容の中心は文法事項となっており、教科書も文法シラバスであることがうかがえる。また文法事項の指導に関しては導入→練習→表現活動の流れになっているが、表現活動に当たるOral presentation of today's materialがどの程度生徒の表現能力を引き出す活動になっているかは指導案だけでは判断が難しい。

文法事項の導入の仕方について池永（1981）は、自然な文脈の中で帰納的に文法を導入することで生徒に「類推」させることが大切であるという考えがある一方で、演繹的に文法を教える方が能率的であり学習者の知的発達段階に適しているという考えもあることを紹介した上で、英語授業の到達目標として、文法を習得することにより、より適切に言語が運用できるようになることを挙げている。

また高橋（2017）は、短・中・長期的視点から英語授業過程に再検討を加えるとともに、新学習指導要領で求められる中学校における英語授業のモデルを以下のように提示している。

表5 授業過程の基本形（中学校の授業モデル）（高橋，2017）

A. Warm-up [3 min.] Greetings & Singing an English song (Chant, Bingo, Tongue twister, Small talk, etc.)
B. Review [5 min.]
C. Presentation and Practices of the New Language Materials [20 min.] 1) Oral presentation of today's target sentences (with the new structure) 2) Confirmation of the points (=Meaning, Form & Function) 3) Mim-mem (mimicry-memorization) 4) Manipulation drills (Pattern practices, drills, oral composition, etc.) 5) Communication activity / Self-expressing activity
D. Reading Today's Text [20 min.] 1) Oral introduction / interaction of the new text material 2) Check of understanding (Questions & Answers, True or False quiz, etc.) 3) Pronunciation drill of the new words and phrases (with flashcards) 4) Listening to the CD as a model (with the books open) 5) Reading aloud i) [Q&A Reading for further understanding of the text (when necessary)] ii) Chorus reading after the teacher (Sense group → Whole sentence) iii) Read and look up iv) Buzz reading v) Individual reading 6) [Text-related communication activity (when the text is suitable for it)] e.g. Reproduction / Retelling, Skit playing, Opinion-making & sharing, Discussion, Debate
E. Consolidation & Assignment of Homework [2 min.]

高橋による中学校の授業モデルはコミュニケーション能力の育成を目指した授業としてこれまでの日本の英語教育における様々な指導法を取り入れたものとなっている。その特徴としては、中学校の授業において大きな比重を占める文法指導に加えて、教科書の題材の指導も1時間に行っている点である。文法指導に1時間、その後教科書の指導に1時間と教科書の1パートに2時間をかける場合も見られるが、1時間で文法指導と教科書の内容の指導とを関連性を持たせて行うことによって、1時間1時間の授業が有機的に結びつくことが考えられる。また文法指導と結び付けて教科書の指導を効果的に行うことによって、単元の終盤においてさらなるコミュニケーション活動や自己表現活動を行う時間を生み出すことが可能となる。

2つ目の特徴としては、文法指導と教科書の指導において明示的に提示するのではなく、生徒の気づきを重視し暗示的に言語材料や題材を提示している点である。3つ目の特徴としては、Presentation→Practice→Productionの展開において、最終活動としてコミュニケーション活動や自己表現活動にまで活動を高めている点である。言語材料や題材の気づきを通じた理解だけでなく、他者とのコミュニケーションを中心とした活動まで行うことによって、それらの定着を図ろうとしている。

図5は文構造・文法事項の口頭導入から言語活動までの流れと

指導過程	指導内容
復習 ↓ インプット (意味の類推) ↓ (規則の発見) ↓ 確認と定着 ↓ アウトプット ↓ 「学習活動」 ↓ 「言語活動」	<ul style="list-style-type: none"> ○新言語材料の学習に必要な・有効な関連既習事項があれば、事前に復習し学習へのレディネスを作る ○新言語材料を含む文を、生徒に理解しやすい意味ある文脈の中で与える <ul style="list-style-type: none"> ・豊富なインプットを与え、聞かせることにより、目標文の意味 (meaning) と使い方：機能 (function) を類推させる ・既習構造との対比などを通して、目標文の構造や規則 (form) を発見させ、その内在化を図る ○意味と機能、構造のポイントを生徒から引き出しながら整理・確認し、目標文を反復記憶 (mim-mem) させる ○記憶した目標文を応用して、生徒に新たな文を生成、運用させ、その理解と定着を深める ○ドリルの練習活動 (Manipulation drills) で意味・機能・構造の定着を促す ○情報伝達・情報交換活動 (Communicative activities) や自己表現活動 (Self-expressing activities) など運用練習を行わせる

図5 文構造・文法事項の口頭導入のモデル（高橋，2011）

それぞれの活動段階における意義を示したものである。

一方、金谷ら（2009）は中学校英語授業を、教科書の1レッスンを1時間で扱う授業、文法導入を中心にした授業、リーディングを中心にした授業等、活動を中心にした授業に分類し、1時間の授業構成の例を示している。

表6 1レッスンを1時間で扱う授業の展開例

1. あいさつ
2. Warm-up
3. 前時の復習
4. 本時の新出事項の導入 (1) 新出文法事項の導入 (2) 新出文法事項の練習 (ペア活動等) (3) 教科書本文の内容の導入
5. 音読 (1) 新出語句の発音練習 (2) 本文の音読練習から暗唱へ ・ Model reading → Chorus reading → Buzz reading → Individual reading → Read and look-upの順に指導
6. まとめ
7. あいさつ

表6は教科書1レッスンを1時間で扱う授業の展開例を示しているが、高橋の提示したモデルと比較して、新出事項の学習が練習までで留まっており、コミュニケーション活動・自己表現活動まで発展させられていない。一方表7に示された文法を中心とした授業展開例では時間的な問題もあり、コミュニケーション活動まで発展させられている。

表7 文法導入を中心にした授業の展開例

1. Warm-up
2. Introduction of the New Grammar Point
3. Oral Drill
4. Oral Explanation of the Grammar
5. Pattern Practice
6. Communicative Activities
7. Summary
8. Greetings

3.3 英語授業指導案の分析

英語授業研究会 (Japan Association for the Study of Teaching English) は1989年に設立され、英語授業のあり方に関して理論と実践の両面からの研究および教育現場の授業改善を目的として、ビデオによる授業研究をメインプログラムとして月例会及び研究大会を行っている。ここでは、英語授業研究会において過去発表された中学校・高等学校における優れた実践の授業指導案を検討することによって、コミュニケーション能力を育成する英語授業のあり方を検討していく。

3.3.1 中学授業指導案の分析

中学校における英語授業の実践として、1995年度に語学教育研究所によるパーマー賞を受賞した加藤京子教諭と2000年度に同賞を受賞した稲岡章代教諭の授業を取り上げ、学習指導案の分析を行った。

最初に取り上げる加藤京子教諭は、兵庫県三木市立中学校で長年教鞭をとられた先生である。当時勤務されていた三木市立志染中学校での実践が高く評価され、兵庫県の教員として初めてパーマー賞を受賞された。ここで取り上げる加藤教諭の授業は、1994年に英語授業研究会で発表された授業実践である。授業の対象は、兵庫県三木市立中学校2年生1クラスである。扱った教材は開隆堂教科書Sunshine English Course 2 Program 2 Section 3であり、本時で指導する言語材料は過去進行形である。また本時の目標 (Aims of This Period) は以下の通りである。

- ① To have the students get used to the usage of be-verb past forms.
- ② To enable the students to use the past progressive.
- ③ To have the students think about the different meanings which a Japanese expression “sumimasen” contains.

次に取り上げる稲岡章代教諭の授業は、1994年に英語授業研究会全国大会で発表された授業実践である。授業の対象は、兵庫県姫路市立中学校2年生1クラスである。扱った教材は三省堂教科書New Horizon English Course 2 Lesson 4 “Paula’s Summer Vacation”であり、本時で指導する言語材料は、不定詞の目的用法である。また本時の目標 (Aims of This Period) は以下の通りである。

- ① To have the students get used to the usage of infinitives : adverbial use denoting purpose.
- ② To enable the students to talk about their plans for the summer vacation.

加藤教諭と稲岡教諭の授業の共通点は、Jazz chants, 生徒によるspeech, 教師と生徒とのinteraction, 生徒によるdemonstrationといった様々な言語活動を授業に取り入れることによって、教師と生徒、生徒同士の英語による豊富なinteractionを行っていることであ

表8 加藤京子教諭の学習指導案における本時の指導過程

Procedure	Teacher’s activities	Skill
1. Greetings	・ Greet the students (Ss). ・ Ask Ss some questions responding to the Ss answers using the form “Did you?”	S
2. Warm-up Jazz Chants 3. Skit Play	・ Evaluate the students’ skit and give comments.	S
4. Review Speech and Q & A	・ Give Ss back their essays. ・ Choose one of the Ss and have him read his writing. ・ Ask Ss some questions about the speech.	S/L
5. Introduction of the New Material (1) Review of Present Progressive (2) Introduction of past progressive (3) Pair Practice (4) Writing	・ Ask questions about Picture (A). ・ Show Picture (B) whilst introducing one of the new words “similar”. Ask questions about Picture (B). ・ Have one pair demonstrate. ・ Have Ss repeat.	S/L S W
6. Review of the Textbook Reading the Textbook 7. Watching the Video “Sumimasen”	・ Read aloud the textbook. ・ Have one pair read the textbook. ・ Let Ss think about the two different meanings of “Kekkoudesu”. ・ Give another example of a Japanese expression which has several meanings: Sumimasen. ・ Show the four different scenes where “Sumimasen” can be used.	R L
8. Reading Today’s Text (1) Oral Presentation of Today’s Section (2) Tape Listening (3) Reading the New Materials ① Pronunciation drill of the new words ② Model Reading ③ Reading aloud 9. Assignment	・ Introduce the content of Section 3. (have altered slightly the conversation of the textbook and have it taped with the help of an ALT) ・ Show Ss flashcards. ・ Show model reading for Ss listen and repeat. ・ Tell Ss what to do for review at home.	L R

る。これは生徒のコミュニケーション能力を育成する上で重要な点と言えよう。

また高橋による授業モデルで示された生徒による気づきを大切に導入からコミュニケーション活動・表現活動まで段階を踏んだ言語材料・題材の指導が行われている。加藤教諭の授業では、時間の異なる2枚の絵を提示し、教師と生徒のinteractionによって現在進行形と対比しながら過去進行形を自然に理解させる指導が行われていた。一方、稲岡教諭の授業では、ALTの生活に関する英文を聞かせることによって自然に目的用法の不定詞を用いた表現を理解

表9 稲岡章代教諭の学習指導案における本時の指導過程

Procedure	Students' activities	Skill
1. Greetings	<ul style="list-style-type: none"> Greet the teacher in a loud voice. Answer the teacher's questions. 	S
2. Warm-up Jazz Chants	<ul style="list-style-type: none"> Chant clearly with the rhythm. 	S
3. Review Speech	<ul style="list-style-type: none"> Listen to the speech carefully and evaluate it. Answer the teacher's questions. 	S/L
4. Oral Interaction	<ul style="list-style-type: none"> Listen to the teacher and try to answer the questions. 	S/L
5. Explanation	<ul style="list-style-type: none"> Answer the teacher's questions and complete the sentences. This is Ms. Faigen. She went to Australia to see her friend. She goes to college to study Japanese. Read the sentences on the board and know how to write. Copy the sentences. Clarify the meaning. 	R W
6. Practice (1) Famous Stories (2) Shopping	<ul style="list-style-type: none"> Listen to the teacher and try to make sentences explaining the stories. Cinderella went to the castle to dance. Red Little Hood went to her grandmother's house to bring some food. Peach Boy went to "Onigashima" to attack them. Repeat the teacher and know the names of the shops. Listen to the teacher and think about which shop to go. Go to the shops and say the sentences. I go to the bakery to buy some sandwiches. I go to the barber to have a haircut. 	S
7. Music Break "Vacation"	<ul style="list-style-type: none"> Relax and lighten the atmosphere. 	L
8. Consolidation	<ul style="list-style-type: none"> Listen to the teacher. Listen to the model skit. Talk about their plans for the summer vacation in pairs. Show their demonstrations in front of the classmates. Enjoy listening to the demonstrations. 	S

させていた。また学習した言語材料を用いた活動としては、練習の要素が強いが、加藤教諭は導入で使用した絵を用いてペアによるコミュニケーション活動に取り組ませていた。一方、稲岡教諭は目的用法の不定詞を用いて夏休みの計画についてスピーチさせる自己表現活動に取り組ませていた。

3.3.2 高等学校授業指導案の分析

文法事項の指導が比重を占める中学校の授業に比べて、高等学校の授業では教科書本文の指導が授業の中で大きな比重を占めている。

これは中学校の教科書に比べて、高等学校の教科書の題材の内容が豊富であり、その理解の指導に時間がかかることが要因と考えられる。ここでは、2014年度にパーマー賞を受賞された大阪府教員の松下信之教諭の授業を指導案を通して分析することとする。

松下信之教諭の授業実践は、大阪府立高津高等学校第2学年コミュニケーション英語Ⅱにおける実践である。題材は啓林館ELEMENT English Communication II Lesson 4 "Life in a Jar"である。本時は9時間展開の単元の3時間目に当たり、Lesson 4 Part 2の学習が中心である。本時のねらいは以下の通りである。

- ① Students will be able to understand the content of part 2 of this lesson by listening to the teacher and discussing the topic with their partner.
- ② Students will internalize the usage of new vocabulary and grammar (the passive with present/past perfect, participles functioning as adverbials) by reading the text aloud and retelling the story.
- ③ Students will think about how hard it is for parents to be parted from their children by acting out the scene.

表10 松下信之教諭の学習指導案における本時の展開

Procedure (Teacher's Activity)	Students' Activity
A. Review of Part 1 (2 minutes) 1. To ask questions about Part 1 using some visual aids on the screen	<ul style="list-style-type: none"> To answer the T's questions
B. Introduction of Part 2 (4 minutes) 1. To introduce Part 2 and give some pre-reading questions	<ul style="list-style-type: none"> To grasp the outline of today's text as well as to understand the questions
C. Reading Comprehension (10 minutes) 1. To tell the students to read Part 2 silently finding answers to the pre-reading questions 2. To help the students to understand the content and grammar points more deeply by asking questions, having the students discuss the topic and share their ideas	<ul style="list-style-type: none"> To read the story silently for comprehension To answer the questions and discuss the topic in pairs To share their ideas
D. Reading Aloud (14 minutes) 1. Model reading 2. Chorus reading 3. Blanked text reading in pairs (To tell the students to read the text changing the verb forms and fill in the blanks)	<ul style="list-style-type: none"> To listen carefully to the T's model reading To read after the teacher To read the text changing the verb forms and fill in the blanks
E. Story Retelling (8 minutes) 1. To retell the story as a model 2. To have the students try to retell the story in their own words individually and in pairs	<ul style="list-style-type: none"> To listen to the T's model To practice story retelling individually and in pairs

<p>F. Impromptu Acting (10 minutes)</p> <p>1. To make partners with someone who will play the same role and discuss with that partner what they might say as Irena or as a parent, in the situation of Irena taking the children from the parents to try to save them</p> <p>2. To tell the students to act as Irena and a parent of the child</p> <p>3. To tell two students to do it in front of the class</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ To make a pair and discuss what they may say in the situation ・ To act as Irena and a parent of the child thinking of their feelings ・ To act in front of the class (two students)
<p>G. Consolidation (2 minutes)</p> <p>To tell the students what the assignment is and notify them what they will learn next time</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ To listen to the teacher

松下教諭の扱った題材Life in a Jarは第二次世界大戦中にユダヤ人の子どもたちをナチスドイツの迫害から救うために尽力したソーシャルワーカー Irena Sendlerに関するものである。パワーポイントによる画像を使用した教科書本文の復習から始まり、本文の口頭導入、理解、音読を経て、教科書の内容のリテリング、即興による対話といったアウトプット活動まで展開されている。とりわけ、授業の最後に行われたIrena SendlerとJewish motherの役を演じた生徒による即興の対話の完成度には目を見張るものがある。

松下教諭の授業展開の特徴の1つ目は、中学校と違って教科書の内容理解を中心に据えていることである。文法事項(本時の場合は分詞構文)指導は、教科書本文の音読の段階において、分詞構文の表現を他の表現に置き換えさせることで、その理解を促している。教科書の音読の段階では、Oral introductionや黙読を通して生徒はすでに本文の内容を理解しているため、日本語訳を行わずに文脈を通して分詞構文の意味を自然に理解することが可能となっている。次の特徴として、教科書本文の内容理解を授業のゴールとするのではなく、リテリングや即興による対話といった内容理解に基づいた生徒主体の表現活動に取り組みさせている点が挙げられる。これは加藤教諭や稲岡教諭の中学校の授業とも共通する点である。

表11は松下教諭の授業の指導過程を裏付ける考え方を示している。口頭導入における留意点として7点が挙げられているが、教科書本文の内容を新出の語彙や文構造・文法事項を導入するだけでなく、次の読解活動のために読むポイントを示したり、授業後半のアウトプット活動につながる語彙や情報を提示したりといった点が注目すべきである。Reading Comprehensionにおいては、ただ教科書本文を読んで内容を理解させるだけでなく、事前に与えておいた質問や内容に関する質問について生徒同士で意見を交換させることによって、さらに深い内容理解を目指している。音読活動においては教師による模範音読を聞くことから一斉読みを経て、Blanked text readingに取り組みさせている。これは動詞の原型だけを提示しておき、文脈に応じて不定詞や動名詞といった適切な形に返還させる活動(form-focused)と()内に内容語を補いながら音読させる活動(content-focused)から構成されており、十分な時間をかけて活動に取り組みさせている。ここでも内容理解だけでなく文構

表11松下信之教諭の英語授業の展開

<p>(1) Oral Introduction</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新出語彙の導入 ②複雑な文構造や文法事項の内容提示 ③背景知識の活性化 ④題材と生徒をつなげる(題材を生徒と身近なものとする) ⑤生徒のアウトプットを念頭に置いた情報や語彙の提示 ⑥既習の語彙や文法を自然な文脈で使用するモデル ⑦読むポイントを与える(読んでみたいと思わせる)
<p>(2) Reading Comprehension</p> <ul style="list-style-type: none"> ①生徒が読んだ後、英語でのやり取りで内容理解を深める ②必要に応じて補足説明を行う
<p>(3) Reading Aloud</p> <ul style="list-style-type: none"> ①Model Reading ②Chorus Reading ③Blanked Text Reading in Pairs (Form-Focused → Content-Focused) <p>* その他の音読活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ④Overlapping (Parallel Reading) ⑤Timed Reading ⑥Read and Look Up ⑦Pair Reading ⑧Shadowing ⑨Reading Aloud Using Japanese
<p>(4) Story Retelling</p> <ul style="list-style-type: none"> ①キーワードと絵を与える ②キーワードを生徒が選ぶ ③リテリングを基にした英語でのやり取り
<p>(5) レッスン内の自己表現活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ①(1)~(3)の活動で使用した言語材料を使用する活動 ②生徒自身が話したこと、書いたことを振り返る
<p>(6) 単元のまとめとしての自己表現活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ①これまで学んだ言語材料を使用する場面 ②異なる視点や関連する内容を読ませ、考えさせることで題材に対して深い思考を促す ③即興での発話からディスカッション、ライティング活動につなげる ④1年生でスピーチのスク립ト作成、発表、2年生でパラグラフライティング、3年生で複数のパラグラフから構成されるライティングを行う

造・文法項目にも焦点を当てた活動に取り組みさせることによって、さらに深い内容理解が可能となり、次の表現活動を促進する役割を果たしていると言えよう。

3.4 コミュニケーション能力を育成する英語授業の指導過程

以上見てきたように、PalmerによるOral Methodの導入以降、現在のコミュニケーション能力の育成を主眼とした英語教育まで、その時代における教授法の影響は受けながらも、英語授業の指導過程において大きな相違は見られない。これは今まで日本の中学校・高等学校における英語授業の指導過程がPPPに代表される文法事項・文構造の習得に重点を置いて構成されてきたためであると考えられる。Harmer (2007) はPPPの特徴について次のように述べている。

The PPP procedure, which was offered to teach trainees as a significant teaching procedure from the middle of the 1960s

onwards, came under a sustained attack in the 1990s. It was, critics argued, clearly teacher-centered, and therefore sits uneasily in a more humanistic and learner-centered framework. (Harmer 2007, p. 66)

1960年代に確立されたPPPの指導法は1990年代には教師中心であって人間主義的な学習者中心の教育にはなじまないという批判にさらされるわけである。そこで脚光を浴びだしたのがTask-based Learning (TBL) やFocus on Formといった指導法である。現在これらの指導法に基づく様々な実践研究が重ねられており、今後日本の英語教育に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

今回の研究では語学教育研究所によるパーマー賞を受賞された中学校・高等学校3名の教諭の授業指導案の検討を行った。特に中学校の二人の教諭の授業は、PPPの指導法を基準としながらもPresentation, Practice, Productionの内容や指導技術に多くの工夫が見られた。また3つの活動に自然なつながりがあり、それぞれの活動に使用される英語の量が豊富であった。特にOutputの活動に生徒の自己表現をうまく取り入れており、授業展開は教師主導であるが言語活動は生徒主体となっていた。さらに教師と生徒、生徒同士のインタラクションを多く授業に取り入れていることも授業の特徴となっていた。これらの要素が生徒のコミュニケーション能力の育成のポイントと言えよう。

一方、高等学校の授業は、中学校と違って、文法指導が授業の中心ではなく、教科書の内容理解とそれに基づく表現活動が中心となっていた。中学校がPPPの指導法に基づくものであるのに対して、高等学校の授業はFocus on Formの指導に近い指導であると言える。教科書の内容理解を中心に、文脈の中で自然に文構造や文法事項の意味や構造を理解させる指導がなされていた。また中学校の授業と同様に豊富な英語のInputと生徒の自己表現に基づく深い内容のOutputが行われていた。

4. 研究の成果と今後の課題

今回の研究の目的は、学習指導要領において英語教育の目標として掲げられてきたコミュニケーション能力の育成を実現させるために求められる中学校・高等学校における英語授業のあり方を検討することであった。特にコミュニケーション能力を育成する視点から、どのような教授理念に基づき、どのような指導過程を通して授業を構築するべきかを研究した。

授業計画の視点としてBrown (2001) や青木 (1994) による先行研究から、英語授業を計画する上で必要な要素や指導過程を構成する活動とその意義についてまとめることができた。その中で1時間の授業はそれだけで成立するものではなく、前後の授業や単元、年間指導計画と密接に関連していることが再認識できた。

また教授法と英語授業の構成においては、金田 (1986) 、宮田 (1984) 、池永 (1981) らの先行研究を基にPalmerのOral Method以降日本の英語教育が影響を受けてきた教授法と英語授業との関連を検討した結果、時代の指導法による一定の影響は認められるが、英語授業の指導過程において大きな相違は見い出せなかった。これはPPPに代表される文法事項・文構造の習得に重点を置いて英語授業が構成されてきたためであると考えられた。

最後に、語学教育研究所によるパーマー賞受賞者の中学校・高等

学校の授業における指導過程を指導案及びビデオ映像から分析を行った結果、中学校・高等学校においてコミュニケーション能力を育成する授業のポイントと指導過程の特徴が明らかになった。

以上のように日本の英語教育における授業構成の変遷に考察を加えるとともに、生徒のコミュニケーション能力を育成する授業として現代を代表する授業実践を分析することによって、新学習指導要領によって大きく変化することが予想される英語教育において目指すべき英語授業のその方向性を示すことができたと考えている。

ただ、PPP授業モデルに対する批判に基づくTask-based LearningやFocus on Formといった指導法の台頭を無視することはできないと考えている。新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために、これからの時代の英語授業は具体的にどうあるべきなのか。これらの新しい指導法を研究するとともに、これから時代に求められる英語授業のあり方をさらに研究していく必要がある。

引用参考文献

- Brown, H. D. (2001). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy, second edition*. NY: Pearson Education.
- Farrell, T. S. C. (2002). Lesson planning. In J. C. Richards & W. A. Renandya (Eds.), *Methodology in language teaching: An anthology of current practice*, 30-39. NY: Cambridge University Press.
- Harmer, J. (2007) *The practice of English language teaching, fourth edition*. England: Pearson Education Limited.
- Krashen, S. D. & Terrell, T. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Oxford: Pergamon Press.
- Thornbury, S. (1999). *How to teach grammar*. England: Pearson Education Limited.
- 青木昭六 (1990) 『英語授業の組み立て－よりわかりやすく、より興味深く－』 開隆堂出版
- 青木昭六 (1994) 「英語教育方法論 (2) 実践編」片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男 (編) 『改訂版 新・英語科教育の研究』大修館書店, 197-203.
- 青木昭六・田中正道 (編) (1985) 『伝達重視の英語教育－ノーショナル・シラバスと英語指導－』大修館書店
- 池永勝雅・小笠原八重 (1981) 『英語指導の基本』 桐原書店
- 稲岡章代 (1994) 「英語科2年4組指導案」英語授業研究会 第6回全国大会 ビデオによる研究授業と研究協議資料
- 岩本京子 (1994) 「英語科2年1組指導案」英語授業研究会 1994年度研究大会 ビデオによる研究授業と研究協議資料
- 金谷憲 (編) (2009) 『英語授業ハンドブック 中学校編』大修館書店
- 金田道和 (編) (1986) 『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語の授業分析』大修館書店
- 松下信之 (2014) 「コミュニケーション英語Ⅱ 英語で理解を深め、生徒のアウトプットを促す授業 (高2)」『英語授業研究会 設立25周年記念第26回全国大会発表資料集』, 6-11
- 宮田学 (1984) 『英語教育の理論と授業の構想』福村出版
- 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等

改定のポイント」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/___icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf 2019.8.8データ取得

文部科学省 (2018) 「外国語編 英語編 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説」

www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf 2019.8.8データ取得

高橋一幸 (2011) 『成長する英語教師－プロの教師の「初伝」から「奥伝」まで－』大修館書店

高橋一幸 (2017) 「短・中・長期的視点から授業過程を再検討する－新指導要領で求められる英語授業もふまえて－」『英語授業研究学会 第29回全国大会発表資料集』, 31-34

A Study on the Teaching Procedure to Foster Communicative Competence in Japanese English Education

Noriaki WADA

Abstract

Fostering students' communicative competence has been the goal of Japanese English education in the Course of Study of the Mext (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) for decades. The purpose of this study is to examine how to organize English lessons to foster communicative competence. Especially it is to examine the teaching procedure of one lesson from the viewpoint of fostering communicative competence.

By examining the teaching procedures which represent the main Second Language Acquisition theories the three following findings were recognized.

1. One teaching lesson is the end result of a complex planning process including the annual, term and unit plans, which is consisted of a unified set of activities.
2. The teaching procedures have been influenced by the prevailing teaching theories of the times. However, much difference has not been recognized among these procedures. It is due to the fact that much emphasis has been put on teaching grammar in English classes in Japan.
3. By examining some English classes which received Palmer Prize, some characteristic of the communicative classes have become clear.

keywords: components of the English class, teaching procedure, communicative competence, the New Course of Study, PPP